

## ハス（ハチス）

牧 幸 男

ハスの花は、酷暑がよく似合い、お盆の行事に欠かせない植物である。水面を覆う葉の間から、すらりと抜け出した茎の頂に造花のような花が咲く。子供の頃、母から蓮は花が咲くときはポンと音がすると教わった。蓮の花を見ると、母の言葉が蘇るが、確かめたことはなかった。ある時「蓮の花は開くとき音はしない。」との記述を読み、母の言葉を確認なくて良いのだとほっとしたことがあった。蓮は古い時代から話題になってきた植物だ。

原産地はインドらしいが、詳しいことは不明とのこと。中国には65年頃伝えられたとされている。蓮はスイレン科の水生植物で、野生品種は熱帯アジア産と北米産の二種類がある。現在は広く各地の池や沼、あるいは水田などに植えられている。地下茎は節が多く、白色で長く水底の泥の中をはい、疎らに分枝し細長く円形である。秋の終わり頃、末端が甚だしく肥厚し、いわゆる蓮根となる。葉は地下茎から直接出て、柄は長く、直立して水面に出る。葉身は扁円形でたて形、両側がややへこんで径40cm前後である。夏、長く直立した花柄の先に紅色、淡紅色、白色等の大きく美しい花を付ける。果実は橢円形、果皮は硬く暗黒色、中に肥厚した白色の子葉と緑色の幼芽くよく（苦蕒）がある。普通蓮根を食用にするが、種子も食用にする。

現在は、改良が進み様々な品種が生まれ、大別すると観賞用と食用に分けることができる。蓮の花には一重、半八重、八重が、色は白、紅、斑入り、黄等がある。他に、小型の茶碗ハス、一連二花をつける双頭蓮や数花つける多頭蓮もある。一方、食用蓮は蓮根として市場に出るが、生産量を増やすため品種改良が進んでいる。蓮の花の開閉は、初日は夜明けと共に咲き半開、正午頃閉じる。2日目は早朝満開となり昼頃閉じ、3日目は再度満開となり一部の花弁を落とし始め、4日目で花弁を落として花托だけになる。



1日目



2日目



3日目



4日目

世界的に蓮の研究で知られている、大賀一郎博士（1998～1945）は1917年（大正6年）、中国東北部で500年前の種子の発芽に成功。1952年（昭和27年）千葉県検見川町の地中から発見した約2,000年前の種子を開花させて話題になったことがある。このような事実から、日本への蓮の渡来は非常に古く、稲などと一緒ではないかと言われている。『古事記』(712)の雄略天皇（456～479）が、赤猪子\*との約束を忘れたお詫ひに送った手紙に「日かえ下江の入江のはちす 花はちす 身の盛り人 羨しともろきかも」の歌に詠まれているのが最も古い記録である。その後、仏教が本格的に普及すると、蓮に対する関心が高まる。この経緯は『万葉集』(629～759)には蓮はちすの短歌は4首登場するが仏教との関係はなく、『古今和歌集』(905～918)では仏教臭が強くなってくるので分かる。

注\*引田部赤猪子：雄略天皇が三輪川に行幸したときにその美しさに目をとめた女性。（詳細略）

この花が神聖な植物として尊敬されるのは、葉と花は泥中に育っても何ものにも染まらず、清らかな姿を保つ姿に基づいている。『仏説阿彌陀經』(1C頃成立)には、極樂浄土の七宝の池には大きな蓮が咲き乱れて、極樂浄土を象徴する花であると記述がある。また、仏の妙法を蓮華にたとえた法華經を『妙法蓮華經』(法華經)(406頃成立?)で、「結跏趺坐」を蓮花坐、仏菩薩の台座を蓮華座と呼び、仏教との関係の花と記述がある。わが国でも同様、仏教思想の普及により、平安時代以降神聖な花としての位置を占めてきた。『枕草子』(1001完成)の63段に「蓮葉、万づの草よりも、すぐれてめでたし。妙法蓮華のたとえひにも、花は仏にたてまつり、実は数珠につらぬき念仏して、往生極樂の縁とすればよ。また、はななきころ、緑なる池の水に、いとおかし。「翠翦」?「翠扇」\*とも詩つくりたるこそ。」と仏教に関心が深まっている記述がある。

注\*：藤原公任(966~1041)編纂の『和漢朗詠集』にある。

中国の周敦頤(1017~1073)は愛蓮説の詩の中で、「予独愛蓮之出淤泥而不染、濯青蓮而不妖、中通外直、不蔓不枝、香遠益清、亭亭淨植、可遠觀而不可褻玩焉。・・・蓮、花之君子者也。」(予は独り蓮の汚泥より出でて染まらず、清蓮に濯はれて妖ならず、中は通じ外は直く、蔓あらず枝あらず、香遠くして益清く、亭亭として淨く植ち、遠觀すべくして褻玩すべ・・・蓮を之愛する、予に同じき者何人ぞ)と詠っている。

我国でも蓮には古くから詩歌の対象になってきた。

ひさかたの 雨も降らぬか はちす葉に たまれる水の 玉に似た見む  
 くれないの 蓮の八花を 広末の かめにを挿せば かおり家にみつ  
 沼の蓮 葉さへ花さえ 売られけり  
 興亡や 千万の蓮 くれないに

作者不明(万葉集)

伊藤左千夫

小林一茶

山口青邨



ハスの果実

〔植物名は、古名の蜂巢の略、果実に入った花托のようすが蜂の巣に似るからである。漢名は蓮〕と牧野富太郎博士は述べている。別名に蜂窩、池見草、露玉草、露堪草、芙蓉、荷等がある。由来は、蜂窩は蜂巢と同じ、池見草は池に生育する、露玉草と露堪草は葉に露が小さい玉となって集まるから、芙蓉は美しい意味、荷は葉が大きい意である。学名はNelumbo nuciferaで、属名はセイロンの土語、種小名は硬果を有する意から、果実が硬いことを示している。

薬用は、『神農本草經』(250~280頃編纂)の上品に「藕實」の原名で収載されている。『爾雅』(BC200頃成立)に「荷は芙蕖\*1なり。その莖は茄(蓮の茎のこと)、その葉は漚(か)、その本は密、その華は菡萏(かんとん)、その實は蓮、その根は藕\*2、その中に、葍(か)の中は薏\*3なり」の記述があり、古くから使われていたこと分かる。

注\*1：値段が安くない 注\*2：蓮根の意 注\*3：蓮の実のなかの実

薬用利用は、漢方製剤でも使用され、蓮の実を生薬名連實と呼び、下痢、嘔吐に、皮を除いた種子は生薬名を蓮肉と言い鎮静、滋養強壮に利用する。民間薬としては体温保持、下痢、食欲増進等である。

食用は、蓮は全て利用する。葉は器に使われ、種子の胚乳は蒸したり煮たり、つき砕いて食用に、花茎や根(蓮根)は野菜となる。蓮の葉(荷葉)の煮汁で炊いた蓮飯は、不老長寿に効ありと聞く。

花言葉は「信用」、「離るる愛」である。



市販の蓮根



スリランカのハス